

至誠の足跡 (4)

## 平塚らいてう 女性・平和運動のパイオニア

### 【要約】

今もなお日本には、女性への偏見差別がみられる。これまでも女性の差別を撤廃する運動があって、かなり改善されてきた。その女性解放運動のパイオニアが平塚らいてうであった。戦前から女性の参政権獲得の運動のリーダーであった。日本には、女性差別、女性への偏見が今もなお指摘される。戦前から女性差別の運動をリードしてきたらいてうに、禅に基づく深い自己洞察があったということがもっと知られるべきであろう。彼女の女性解放運動、平和運動の研究は多いただろうから、ここでは、そういうテーマには全く触れずに、禅やマインドフルネス（自己洞察、自己探求）が関心を持つ自己の深い心の探求の側面に焦点をあてた。

●Key words : 女性解放運動、禅、男女差別がない、人間に共通の根源

### 女性解放・平和運動のパイオニア

平塚らいてうは、女性解放運動、平和運動家として知られていて、大変著名な人である。日本女子大学の卒業生であり、大学のホームページに「女性・平和運動のパイオニア 平塚らいてう」として、次のように紹介されている。

「東京本郷で、裕福な家庭に生まれた平塚らいてう（本名：明（はる））は、創立者 成瀬仁蔵 の書いた『女子教育』に感銘を受け、日本女子大学校の第3回生として家政学部に入學。在学中は、成瀬仁蔵が創立以来続け、現在、科目名を変えて継承されている『実践倫理』の授業にて自ら質問をぶつけるなど、積極的な学生でした。

卒業後、『青鞥』を發刊。創刊時の「元始 女性は実に太陽であった」という有名な辞は、女性解放運動の宣言とよく知られています。

その後、法によらない結婚をし、母性保護論争で与謝野晶子と論争、当時の世間を賑わせました。母性保護論争を経て、1920年3月、「新婦人協会」を組織し母性の権利確立のための社会運動に乗り出しました。そして国会請願運動の結果、1922年2月、女性の政談集会への参加および発起が認められることになりました。戦前の日本では、女性の政治的権利獲得に成功し

た唯一の例になります。この後、消費組合運動を實踐し、戦後は平和運動のオピニオンリーダーとして影響を与えました。

思想家として、平和を愛し、女性解放に一生を捧げた平塚らいてう。

本学では、男女共同参画社会の實現および女性解放を通じた世界平和に関する研究や活動に光を当てること、ならびに若い世代に対して平塚らいてう氏の遺志を継承していくことを目的として「平塚らいてう賞」を設けています。」（日本女子大学ホームページ）

### 簡単な年譜

らいてうの年譜を見ておく（自伝267）。

平塚らいてうは、明治19年（1886）、東京麹町に生まれ、大正、昭和にわたって活躍し、昭和46年（1971）に85歳で没した。本名、明（はる）。父、定次郎は、明治政府の役人、会計検査院に勤める。明治36年、17歳、日本女子大学に入學。学長の成瀬仁蔵に哲学を教育された。哲学書、宗教書を読みあさる。本郷教会に出入りする。日暮里両忘庵の積宗活のもとで禅の修行に励む。明治39年、日本女子大卒業。禅の修行を続ける。見性に達し、慧薫の名を授けられる。

明治44年、25歳、らいてうを发起人として女性文芸雑誌『青鞥』発刊。創刊の辞『元始女性は太陽であった』は大きな反響を呼ぶ。

大正 元年、26歳、『青鞥』に発表された荒木郁子の小説「手紙」によって発禁処分を受ける。

大正 2年、『青鞥』がまた発禁処分。

大正 3年、28歳、奥村博（23歳の画家）と結婚生活にはいる。女性を法的無能力者とする家族制度への怒りから、夫の家に入籍する結婚の道をとらず、婚姻届けを出さなかった。

『青鞥』は販売不振、社員の離散に悩む。30歳の時、『青鞥』は無期限休刊。

大正 4年、29歳、長女あけみ出産。31歳の時、長男敦史出産。

大正 7年、与謝野晶子との母性保護論争を開始。

大正 8年、『我が国における女工問題』を『婦人公論』に発表、婦人の労働について発言を始める。

大正 9年、当時は、治安警察法第5条で、婦人の政治活動が禁止されていた。婦人参政権獲得の運動に従事。市川房枝、奥むめおらと、「新婦人協会」を発会。婦人参政権と母性保護を要求。雑誌『女性同盟』を創刊。

大正10年、市川房枝、協会から離れて、アメリカへ行く。山川菊栄が『太陽』にらいてうを攻撃する文を載せる。らいてうは体調を崩し、千葉県竹岡に家族とともに転居。博は神経性のじんましんがひどく栃木県佐久山に移り、那須温泉、塩原温泉で静養。

大正11年、治安警察法第5条が改正され、婦人の政治活動が認められる。参政権はなかった。

大正12年、東京に帰り、千駄ヶ谷に住む。二年後、千歳烏山に転居。博史が成城学園の絵画と演劇の教師となる。らいてうは、この頃数年間は社会活動に参加せず、家庭にあった。

昭和 3年、総選挙で、らいてうは婦選をうたう無産政党を応援した。

昭和 4年、43歳、らいてうは、社会主義政党に満足せず、消費組合運動に向かう。東京共働社消費組合成城支部の会員となる。

昭和 5年、消費組合「我等の家」を設立、組合長となる。高群逸枝に誘われて、無産婦人芸術連盟の会員となる。

昭和13年、52歳、「我等の家」を家庭購買組合と合併。

昭和16年、55歳、博史と婚姻届、平塚姓から奥村

姓となる。

昭和17年、博史とともに茨城県小文間村に疎開、農耕生活に入る。

昭和22年、61歳、疎開先から帰京し、成城の家に敦史夫妻と同居。

昭和24年、世界連邦建設同盟に参加、理事となるが、のち運動から離れる。

婦人の日大会から、婦人参政功労者として感謝状を受ける。

昭和28年、全日本婦人団体連合会を結成し、会長となる。国際民主婦人連盟副会長に就任。

昭和30年、婦団連の会長を辞任、名誉会長となる。

昭和37年、76歳、新日本婦人の会が結成され、代表委員となる。

昭和41年、80歳、「ベトナム侵略戦争をやめさせるための全日本婦人の訴え」を発表、反戦運動を行う。

昭和45年、市川房枝、植村環らとともに、安保条約延長反対を訴える。

昭和46年（1971）85歳、胆嚢胆道癌により永眠。

## 元始、女性は太陽であった

平塚らいてう（らいちょう、と呼ぶ）は日本歴史上、第一にあげられる女性解放運動家である。これほどの著名人でありながら、彼女の著書を見ると、奢りなく、名誉を求める気持ちがない。

らいてうの思想の奥底には禅の実践から身につけた、人間存在の原構造を基礎にした男女平等の思想がある。らいてうの女性解放運動へのあくなき行動力にも、本来の自己の慈悲心が実践行動にあらわれざるをえない、自ずからの働きだと思われる。

らいてうの著作の中に、深い禅とかわりのある言葉が多い。ごく一部をご紹介します。

## 人間の平等の思想

らいてうたちは女性だけの雑誌『青鞥』を発刊したが、その冒頭に掲載した論文『元始、女性は太陽であった—『青鞥』発刊に際して』は大反響を呼んだ。女性の自立、女性の人間としての解放宣言だった。（1911年、25歳の時）

彼女の論文から一部を抜粋する。

## 女性よ、潜める天才性にめざめよ

「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光りによって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。」(【1:14】から、評論集p9から)

「私どもは隠されてしまった我が太陽を今や取り戻さねばならぬ。」

「私ども女性もまた一人残らず潜める天才だ。天才の可能性だ。可能性はやがて実際の事実と変ずるに相違ない。ただ精神集注の欠乏のため、偉大なる能力をして、いつまでも空しく潜在せしめ、ついに顕在能力とすることなしに生涯を終るのはあまりに遺憾に堪えない。」

「<sup>ひ</sup>実にここは真空である。真空なるが故に無尽蔵の智慧の宝の大倉庫である。一切の活力の源泉である。無始以来植物、動物、人類を経て無終に伝えらるべきいっさいの能力の福田である。ここは過去も未来もない、あるものはただこれ現在。」

ああ、潜める天才よ。我々の心の底の、奥底の情意の火焰の中なる「自然」の智慧の卵よ。全智全能性の「自然」の子供よ。」

女性も潜める天才性に目覚めよ。天才とは、自分で自分を縛っているものから解放されたところに現前する本来の自己であるという禅思想が基礎にあることがわかる。

## 学者批判

「いっさいの思想は我々の真の智慧を暗まし、自然から遠ざける。智識をもてあそんで生きる徒は学者かもしれないがとうてい智者ではない。否、かえって眼前の事物そのままの真を見ることの最も困難な盲(めしい)に近い徒である。」

実践、体験を軽視する独断的な知識偏重の学者を批判する。実践、行動を重視するのである。(今となっては、不適切な表現があるかもしれないが、そのまま掲載する。時代、国が変わると、良し悪しの評価が変わるのである。社会は「無評価」ではない。)

## 自我の解放

積尊は「実に全自我を解放した大自覚者となったのだ。」と積尊を例にだし、女性解放のためには、自分で自分を縛っていることから解放せよ、と訴える。寺院や教会の宗教から脱することを訴える。彼女は、自立精神があった。

「女性よ、芥の山を心に築かんよりも空虚に充実することによって自然のいかに全きかを知れ。」

「発展の妨害となるもののすべてをまず取除かねばならぬ。それは外的の圧迫だろうか、はたまた智識の不足だろうか、・・・その主たるものはやはり我そのもの、天才の所有者、天才の宿れる宮なる我そのものである。」

我れ我を遊離する時、潜める天才は発現する。」

「私どもの救い主はただ私どもの内なる天才そのものだ。もはや私どもは寺院や教会に仏や神を求むるものではない。」

私どもはもはや、天啓を待つものではない。我れ自からの努力によって、我が内なる自然の秘密を曝露し、自ら天啓たらんとするものだ。」

寺院、教会、天啓に頼らず、女性自らの努力によって、女性にも根底に隠れている天才性を発現させようという。

## 人の根源を自内證した体験からくる平等思想

以上が『青鞥』からの抜粋であるが、この文章について、らいてうは、後の自伝で、次のように総括する。

「一口にいえば、女というもののなかに非常に立派な神秘的なものが潜んでいるのに、隠されていて誰も気がつかない。ほんとうはみんなとても偉いんだから、周囲に構わず、個人として女が内部に持っている能力を大胆に打ち出してゆけば、そのうちほんとうの女が出てくるに違いない—というのが、私の女性哲学であって、現在の女にはあきたりないけれども、女性の将来には、大きな可能性の潜んでいることを信じ、その一点にすべての希望をつないでいました。」(自伝p94)

この女性哲学は禅からくる人間の根底の尊厳性、平等性からくる確信である。最近、禅は、差別観に悪用されたと禅を悪者にする学説があるが、それは当たらないだろう。禅や仏教が悪いのではなく、らいてうのような深い解釈ができない者が悪用したのではないのか。西田幾多郎も宗教にかかわらない根源的な平等性をいうが、禅にもあったという。浅い解釈で悪用する人を批判すべきであって、禅を批判するのは当たらないだろう。だからこそ、禅や仏教の真意の学問的な説明が必要である。

### らいてうの参禅、そして哲学との出会い

らいてうは学生時代と卒業後しばらくの間、熱心に坐禅をしている。指導を受けたのは、臨済宗の釈宗活、中原鄧州（南天棒）である。熱心に坐禅したので、わずか一年半で見性（けんしょう）している。その参禅の様子を彼女が書いた自伝から抽出する。

十七歳の時、日本女子大学に入学したが、校長の成瀬仁蔵に哲学を教育された。哲学や宗教に関心を持ったのは、この先生の影響であった。学友の表面だけを飾る風潮に反発を覚え、友人が少なく、孤独を感じた。

「当時の女子大は学校の講義時間よりも、また、自学自習主義にかかわらず、自主的な研究時間などはなく、学生の同じような会合につぶす時間が実に多かったのです。クラス会、縦の会、横の会、寮の会、家族会というぐあいに、いろいろな会合を開いて、上級生がリーダーになり、「実践倫理についてどう感じたか？」というようなことがテーマになって、みんなに感想を述べさせるのでした。感想のない人に対しても、こしらえた感想をいわせるというやり方ですから、真実の告白にふれることは少なく、同じような見えすいた付け焼刃をいう人が信用され、自己に忠実な者が認められないという結果になっていました。」（自伝p42、以下、頁のみ示す）

### 哲学書、宗教書を読みあさる

孤独感から、図書館で、哲学書、宗教書を読みあさった。聖書を読み、本郷教会に出入りしたが、「海老名弾正牧師の雄弁に感心しただけで、私の魂が求めている

たものは、ついに満たされませんでした。」（p45）

何回か通ううち、ある人から洗礼を強くすすめられるようになって、いやになって、教会に行くことをやめた。

「こうした休みのない暗中模索の精神生活の不安が反映して、だんだんからだの調子が悪く、鼻がわるい、咽喉（のど）がいけない、頭も痛むという具合で、なんども病院にはいっては、いやな鼻の手術をしました。校医は神経衰弱、それにバセドウ氏病の疑いもあるなどといいます。」（p46）

このころ、綱島梁川の「予が見神の実験」を読んで、感動した。

「この文章が、私の真理探究の態度に、一転化をもたらす一つの大きな暗示となったのです。……『予はわが深き至情の宮居にわが神在しぬと感じて幾たびかその光明に心おどりけむ。吾が見たる神は、最早さきの因襲的偶像又は抽象的理想にはあらざりしなり』という一節に至って、急に眼の前が明るくなってきたような気がしました。」（p46）

ちょうど、そのとき、偶然僚友木村政子の机の上にあった、今北洪川師の『禅海一瀾』を読んで坐禅をしようと決心した。

「禅門に静座工夫という一種の内観法があること、この方法による修行者がついに到達し得られる悟り、見性ということは、見神と同一体験に相違ないと思ったとき、大きな希望が湧き上り胸が躍りました。」（p47）

### 両忘庵の釈宗活に参禅

日暮里の田んぼの中の一軒家、両忘庵に行き、宗活老師に相見し、坐禅の指導を受けることになった。

「老師から『父母未生以前の自己本来の面目』という公案をいただきました。『さあ、あちらへ行って坐り方をよく教わってしっかりやりなさい』

老師の言葉はたったこれだけのものでした。また教えられた通りのお辞儀を繰り返して、お部屋を出ました。」（p48）

「両忘庵の参禅は、朝五時から六時位までで、冬の朝は提灯をつけて家を出て、牛乳配達か新聞配達しか通らない暗い淋しい道を歩かねばなりません。それから学校にゆくのですが一病氣以来寮を出て通学していましたからいつも六尺先の地上に、軽く半開の眼を落とし、臍下丹田に力をこめて、一心に公案を念じながら、それこそ不動の姿勢で歩いていました。教室にいても講義は聴いているものの、やはりお腹の底ではたえず公案をみつめているのです。しまいには学校の途中の目白のお不動様の本堂に上って、不動明王の前で一日坐り通してしまうこともありましたが、本堂が何かで賑わうような時は、反対側にある愛染明王の小さな暗いお堂の方へ行って坐りました」(p49)

らいてうは、卒業後、津田英語塾で英語を勉強したが、津田を一年でやめ、成美女学校へ転校した。こういう中でも、両忘庵への参禅を続けた。ここでいうように、坐禅の時ばかりでなく、いつも、自己洞察(妄想をせず、エゴイズムの発現をしないなどの生活上の注意が含まれる)しているから、悟るのである。

## 体調が回復

坐禅をするようになって、まず、体調が回復した。

「参禅を重ねても「本来の面目」は容易に通じそうもないのですけれど、私自信のうえには坐禅をつづけている間にいろいろの変化が知らぬまに起っていました。まずからだの調子が変わってきたのに気付きました。頭痛を忘れ、長く悩んだ鼻の通りもよく、声も出し易くなりました。からだ不思議に軽くなり、日に何里と歩くのに少しも疲れを感じません。夢というものをほとんど見なくなったこと、睡眠時間がわずかで足りることなども知りました。

雑念がだんだんにへって、心がよほど透明になってきたからでしょう、視野が広くなり、ものの隅々が見えるようになり、いつも心たのしいのでした。」(p52)

このらいてうの実例でもわかるように、まず、その人の個別の苦悩の問題(人によって心の病氣、心身症、対人問題、など様々)が解消する。だが、ここでとどまって、坐禅が悟りだというようなところにとどまっ

てはいない。対人場面や対社会的行動でない場面の坐禅だけでは、現実の場面での自己の苦悩は解決せず、現実の場で苦悩する人を支援する働きは出てこない。坐禅するうちに現実の苦悩は解決するものもあるが、対社会的場面での実践をさらに続けて人間の共通の根源を悟る人がいる。人間共通の根源を否定するものは、自我に執着してエゴイズムの根が絶たれていないので、自分の力や知性を驕り他者をも苦しめる者もある。男性優位の社会での女性差別もそうであると知る。

## 人間の根源を悟る

らいてうは、わづか一年半で悟りを得た。無我は決して形容詞ではない。虚飾のことばでなく、事実である。多くの学者がというような、無常、無我、縁起などとセットで論理的に理解されるのが真の無我ではない。それは、対象的に考えられた理法であり、その理法を考え、理解している自分が「無我」であることを証拠づけていない。考えている自己がある。無我でない。理解によるものならば、次のような喜びはない。

西田幾多郎は、無字を許された時、「されどわれ喜ばず」と日記に書いているのは、それが、体験ではなくて、理屈で許されたからである。西田が真に見性体験をするのは、もっと後のことである。らいてうは、体験によったので、真底から喜んだ。

「卒業の年の夏七月、公案を解決することができ、この修行にはいる最初の関門を突破したのでした。禅家の人たちはこれを「見性」と申しておりますが……。それはとにかく、私はその日、あまりのうれしさに、とてもそのまま真直ぐに家へ帰ることなどできず、田んぼ道をどこまでも、どこまでも歩いて日暮里から三河島の田んぼを、それから小台の渡しをわたって、西新井の方へ、帰りには豊島の渡船の方へ出て、飛鳥山に登るなど、どの道をどう通ったか日の暮れるまで歩きまわりました。足の疲れはもちろん、自分のからだのあることさえ忘れて天地の中にとけて歩いていました。「心身脱落」という言葉が禅書にありますが、ほんとうにその通りです。無我とは決して形容詞ではありません。これ以後、私は慧薫とよばれるようになりました。」(p53)

「木村さんは私より一年たらず前に見性し、慧浩という安名をもらっていました。ふたりは連れだって大慧禪師書や臨濟録の提唱をきき、接心の時は並んで坐りました。ほかに同じ女子大の英文科生もひとりいました。・・・女のひとはこの外に三、四名もあったでしょうか。」(p53)

釈宗活老師(次にでてくる中原南天棒老師の場合)は、見性した人には法名を与えている。「悟りが真の出家」という立場をとったのであろう。悟ると、これまでの対象的な自分が死に、新しい自己に生まれ変わるから、誕生である。単なる自我の自己であったものが、すべての人間の共通の根源(超個)を基礎にした自己に生まれ変わる。

この後、らいてうの関心は、文学に移り、短歌や小説を書いていたのが、森田草平の目にとまり、家出事件(塩原事件、煤煙事件)を起こす。

## 中原南天棒に参禅

事件後、不愉快なことの連続であった(p66)。友人を訪ねて信州に向かい、浅間温泉や中山村和泉(現在松本市)で静養した。そして、東京に戻り、また坐禅を志す。

釈宗活老師が、布教のため、アメリカに行ったので、興津清見寺の住職坂上真浄老師に参禅した。さらに二十三歳の時、中原南天棒に参禅した。

「秋色深い山国の独居生活から、ふたたび東京にかえって来た私は、事件前の澄み透った三昧生活から堕ちた、自分の心境の濁りを大掃除するために、神田美土代町の日本禅学堂で、ふたたび禅の修行を最初に劣らぬ熱心さではじめました。ここへは西宮海清寺住職の中原南天棒老師が月一回上京されて参禅をうけておられたので、この南天棒老師に参じ、無門関第一則の「無」を最初の時に劣らない一いえ、それ以上の熱をもって取り組んだのです。」(p69)

中原師に参禅中にも、「無」を通過した。

「さらに年末の臘八接心(ろうはつせっしん)には、わざわざ西宮の海清寺禅堂にまで出掛け、大勢の修行

僧たちといっしょに、きびしい坐り方をしました。・・・いよいよ今日が最後という七日目にようやくのことで無字が通過しました。」(p70)

見性体験は、前にしているが、それを他の師匠に言葉で報告(見解を述べる)するが、厳しい師は、言葉が妥当でないと許可しない。また、いくつかの公案を課される。らいてうは、見性体験はしているの、見解が七日目で許可されている。見性体験がないと、こういうわけにはいかない。らいてうは、二人に印可されている。確かな証拠である。

その後も、しばらく参禅を続けているが、やがてらいてうは師に参禅することをやめる。だが、禅はらいてうの生活そのものとなっていった。自伝や全集にみられる禅についての発言がその後みられる。また禅といわなくても、らいてうの活動には、人間の根底の本質は男女の性によって差はない、という強い確信が貫いている。これが、悟りを得た者が、実際に観る人間の真の平等である。

平塚らいてうは、その思想的基盤が禅と強くかかわっており、健康の点でも坐禅がよいといっている。そこで、若い人に坐禅をすすめている。自伝や全集から、彼女が禅をすすめる言葉をひろってみる。

## 禅はすべての宗教を包み宗派意識を超える

らいてうの著作集によると、らいてうは、キリスト教を信じている娘に、自分の若いころを語る。哲学、キリスト教、綱島梁川の『予が見神の実験』、今北洪川の『禅海一瀾』、両忘庵に参禅したことなどを語り、禅はキリスト教をも包むものであるから、あなたがキリスト教を信仰することを止めないと語る。禅は排他的ではない。他の信仰者を無理にやめさせることはない。深い自己の真髓を悟ると、聖書のキリストの言葉が禅と通じるものがあるとわかるから、らいてうは、娘に「わたしは、キリスト教の髓を得ている」とまで言った。禅とキリスト教の根底は同じものであるという宗教者、哲学者も多い。らいてうもそうである。

らいてうは、娘にこういった。

「もしお母さんが禅をやらず、こんな自由な信仰をもっていなかったら・・・きっとお母さんはあなた

の今の信仰や生活に対し、これだけの自由な、肯定的な態度ではいられまいと思うのですけれど。」

「たとえ過去のお母さん自身は前に言ったとおり、キリスト教にはむしろ浅い因縁しかありませんでしたが、今日のお母さんはキリスト教がまとっている衣や、その衣の色や、形にその影などに迷わされず、かえって端的に、その骨を、髓を、生命そのものをつかんでいるつもりなのです。」

「あなたはまだキリスト教だの、仏教だの、神道だのなんのといって別々なものとして見えるのでしょうか。しかし生命の真理（大道）を見るものにとっては一つです。」（四十九歳の時、【6:18】）

ロゴセラピーのヴィクトール・フランクルが「一人類教」というのと通じるものがある。すべての人が、人種、性別に関係なく、平等の根源を持つというのだ。自己観察で探求して、自ら体験して証明する（自内證という）のであるが、西田幾多郎以来、哲学として論理的にも説明されるようになった。

今、若い女性の自殺が多い。生活苦や親からも愛されなかった自己、自分を肯定できないところから、生きる意味を失う、支援のない孤独など様々な要因が重なり、うつ病になっておられたのだろう。日本の自己探究の哲学や実践には、らいてうの体験した人間の平等の基づくように深いものがある。女性への差別偏見が残る日本で苦悩が大きい、らいてうのいうように自己洞察探求によって、乗り越えていただきたい。

## 女性に坐禅をすすめる

らいてうは、女性が学生時代に坐禅をすることをすすめた。

「ふた昔前、純真な一本気な娘時代の私が全生命をかけて精進したあの禅の猛修行は（若ければこそできた今にして思います）たとえ今、私自身は忘れてしまっている、私の現在の生活に、いいえ私の、おそらく全生涯を通じて、このからだと心とを離れないひとつの強い習慣となっているということは。」

「まったくこの私に座るといことがなかったなら、私の生命は今ごろとうに枯れ尽し、私の力はとうに擦

りへらされて固定した思想や型の中に窒息していたかもしれません。今日こうして日に新たな心をもって、希望と勇気と確信と多くの詩とを、この生ける自然と人生から与えられているのは座るおかげだといっても言いすぎではないでしょう。そうして生活するうえの私のこのひとつの癖が若い時にやった修禅によることを思うとき、他の同窓たちが勉学に専念する貴重な時日をただ黙々と打座（だざ：坐禅する）に消費したことが、その当時周囲の誰かれから笑われたほどそう馬鹿げた真似でなかったばかりか、少しばかりの知識の獲得よりも、はるかに私の生涯にとっては有意義であったことを省みて、感謝せずにはいられません。」

「これからの婦人の現実生活はますます複雑、難渋なものになるばかりです、少しでも余裕のある学生時代に早く奮発心を起こされ、この重大な社会的変革期を、婦人として善処しうるだけの確固たる精神生活の基礎を得られますよう切望いたします。」（四十五歳の時、【5:274】）

## 自分を知る坐禅

さらに、終戦後の六十一歳の時には『あなた自身を知れ』という文章で、若い女性よ、あなた自身を知れ、そのために坐禅をと訴えている。（六十一歳の時、【7:18】）

自己の根源をキリスト教の聖書では「神」と表現したものが、らいてうの体験したものと同じとみている。それは西田幾多郎も同様である。

「若き友よ、あなたは、あなたご自身をご存じですか。」

「あなたという人間を生んだこの大きなのちは、それがいつも宇宙いっぱい、満ちみちているように、自分がこしらえたあなたの内にも同じようにいっぱいにはっています。」

「あなたは神様に抱かれ、神様の懐のなかにはいますが、神様もまたあなたに抱かれ、あなたの懐のなかにはられるのです。」

「自分の正体はどんなものか、静かに座って、あなたの眼を心の奥底まで沈めてよくよくさがしてごらんさい。・・・毎朝または毎夜三十分くらいはできないはずはないと思います。これを幾日か繰り返している

うちに、あなたはきっとわかって下さいます。わたくしの言うことが嘘でも、思い上がりでもないということ、いいえ、昔からすでに明らかにされている真理だということ。」

「聖書をお読みになったあなたは、キリストが「われはアブラハムの生まれぬ前よりあるものなり」とおっしゃったことをご存知でしょう、どれもみんな同じ自覚ですね。そしてここに忘れてならないことは、これは特別に偉い人、選ばれた人だけがそうなのではなく、あなたもそういうこのわたくしもまたわたくしのまわりにいる多くの若者男女誰一人として、そうでないものはないということ、そうでないのは知らないからだけのことなのです。」

「人は誰でも自分自身を知るとき、神を知り、同時に神と人との関係を、また神において一つである人と人との関係をもあわせて知ることができます。」

「若き友よ、あなたご自身を知れ」

さらに、翌年にも、坐禅をすすめた。『学校を出たころのわたくし』【7:23】、1948年、62歳

若いころの坐禅修行体験を述べた後、神とひとつの自己を知ることすすめる。それが、男女平等の自己の根源を知るから禅をすすめているのである。

「わたくしは自我から神にたどりつく女子大卒業前後の自分の求道の姿をおもい起こし、深く省みながらおもうことは神の裏づけのない自我に、言いかえればひとりびとりの自我の奥底に存在する神を自覚しないものの自我にどれだけの尊厳があるかということです。民主主義という言葉が終戦後の合い言葉となり、自我の尊厳というようなことしばしばうたわれるこのごろ、その要件である神性がまったく忘れられているのは、これもやはりただの言葉であって、みずからの意識で認めているのでないためでしょうか。ひとりびとりの自我がみな神を根とし、神において一つであることの自覚なしには、お互いの間のほんとうの平等も、尊敬も、愛も、平和もありえないと思います。今の若い世代がおのれを知り、神を知る（これは一つことです）ことがやはりわたくしには願われてなりません。」

## らいてうの現代的意義

今でもなお、女性差別や性的少数者の差別がみられる。平塚らいてうは、禅を行じて、人間の本質の尊厳性と平等性を悟り、女性を人間として解放すべく活動した。らいてうは「失われた女の「人間性」を女自身の力でとりかえず運動だったといえるでしょう。」と書いていたが、はたして現代、女性はまったく人間性をとりかえし、束縛から解放されているのだろうか。

今でも、女性は男性より劣るもの、重要な仕事は男のものだということは無意識のうちに社会から植え付けられていないだろうか。そのような差別発言をする者がいる。らいてうは、戦前のあのよう困難な時代に勇敢に、地道に女性解放のために重要な活動をした。真実の自己にめざめた女性には大きな力がある。自分を縛らなければ、潜める太陽である女性だという。

らいてうは、若い人に「あなた自身を知れ」と訴えていた。女性が自己自身を知り、政治に、学問に、教育に、宗教に、各種の日本伝統文化にかかわる事業に、また、精神医学の領域に進出していただくならば、すべての人間の尊厳を認めた明るい、住みよい世界になることだろう。

従来指導されてきた禅の難解な方法だけではなく、最近では西田哲学をはじめとして論理的な説明によって納得して自己探求する方法も開発されてきたので、さらに研究を重ねることが求められる。そして、らいてうが主張したように、すべての人の根源の平等性を引き継いで、女性や性的少数者を差別、抑圧から解放していくことが必要であろう。

## 平塚らいてうの足跡を訪ねて

らいてうを「至誠の足跡」で扱うと決定してから、らいてうのゆかり地を訪ねて写真も撮影しようと気にかけていたが、新型コロナウイルス感染症により、都県境を越えた旅行を自粛することを求められて、その機会を得ることが難しくなった。

そこで、NPO法人平塚らいてうの会<sup>3)</sup>のご協力を得た。旧居跡、青鞥社の項について、および冒頭の年譜の一部の情報をいただいた。ご協力に感謝いたします。

### ☆旧居跡

平塚家は麴町区（現千代田区）三番町にあったが、らいてうが小学3年生の時、曙町に移った。32歳の

時、両親が買ってくれた北区滝野川町田端の家に住んだ。昭和17年に茨城県取手市小文間)に疎開した。これらの跡地は当時をしのぶようなものは現在残っていないようである(平塚らいてうの会)。

#### ☆信州静養の地(松本市中山和泉)

塩原事件後、らいてうは信州で静養した。浅間温泉竹の湯(現在、デイサービスになっている)に4、5日滞在し、その後、養鯉所を営む中島家に借間して読書と「高原の秋」を執筆しながら静養した。現在建物はないが池が残っていて、生妻池という。(『平塚らいてうと中川善之助先生』後藤泰一による)

#### ☆両忘庵(東京都台東区谷中7-10-10)

禅の修行をした寺。現在、宗教法人人間禅の擇木道場になっている。

#### ☆「青鞥社発祥の地」のプレート(東京都文京区千駄木5-3-11)

文学に関心を持った平塚らいてうの首唱で、らいてうや物集和子など20代の女性5人が発起人となり、明治44年田村俊子、野上弥生子ら18人を社員として青鞥社が結成された。同年雑誌『青鞥』が発刊された。

青鞥社は、日本で最初の女性による文学的思想団体であり、賛助員として与謝野晶子らも名を連ねた。自我を追求して「家」制度を批判し「新しい女」と呼ばれたが、後半の一年ほど伊藤野枝の手に移り、『青鞥』は、1916年2月号を最後に、4年4か月で無期休刊となった(平塚らいてうの会による)。

最初の事務所が物集和子宅に置かれた。物集宅の跡地に、青鞥社発祥の地のプレートが建てられている。

#### ☆平塚らいてう記念碑、南湖院(神奈川県茅ヶ崎市高砂緑地)

らいてうは26歳の時、生涯の伴侶奥村博史と南湖院でめぐりあった。南湖院は、かつて東洋一のサナトリウム(結核療養施設)とうたわれた。場所は現在の茅ヶ崎市南湖6丁目の県立茅ヶ崎西浜高校や老人ホーム太陽の郷のあたりが比定される。

28歳の時、奥村と共同生活にはいった。29歳の時、長女曙生あけみが生まれた。奥村が肺結核になり、南湖

院に入院したので、らいてうは曙生と共に南湖院の近くの借間に移った。

このようなゆかりの地である茅ヶ崎に平塚らいてうの会により記念碑が建立された。



(らいてう記念碑：高砂緑地)



(南湖院跡地の第一病舎：太陽の郷の敷地内)

#### ☆佐久山旧居(栃木県大田原市佐久山)

35歳の時、心労から体調を崩し、千葉県竹岡に転地。さらに栃木県佐久山に住む。まず、池田家に住み、ついで阿久津家の隠居所に移った。1922年1月から秋まで住んだ。37歳の時、東京に戻り、千駄木に住む。後、成城学園に住む。阿久津家は、現在八木沢家になっており、池田家もほぼ往年のまま残っている

(平塚らいてうを記念する会 第18号による)。こう記録されていたが、令和3年に訪れてみると、両家の現状が大きく変わっていた。元の池田家の建物は解体されて駐車場になり奥に新築の住宅になり、八木沢家

は家屋は残っていたが、普段は住む人がいないらしく、外から見る庭は荒れているような状態であった。

☆らいてうの家（長野県上田市真田町長字十の原1278-720）

NPO 法人平塚らいてうの会（東京都文京区小石川5-10-20）が設立した。ホームページによれば、

『青鞥』創始者・平塚らいてうの明治時代から戦後に至る生涯の資料を展示し、彼女の「平和・協同・自然」を愛した意志をうけつぐ活動として、学習講座やコンサート、自然探訪なども実施している。館内の和室ではお茶会ができ、図書室では図書閲覧等のほか、DVDなどの視聴もできる。」

となっており、らいてうを記念する資料があり、行事が開催される。春から秋の土曜日曜に見学できる。



（らいてうの家：平塚らいてうの会提供）

## 注

1) 深い禅者は自我を脱落したところに体験的に自覚するものが、神、ほとけ、阿弥陀仏、仏性、絶対無、日本的靈性、無相の自己、無分節、などと何と呼ぼうと、同じものをさしていることがわかるという。鈴木大拙は念仏の妙好人（讃岐の庄松など）にそれを見る。キリスト教神学者のエックハルトも、そういう人であると西田幾多郎はいう。禅とキリスト教の深いところの類似性については、西田幾多郎、滝沢克己や秋月龍珉などの著書に詳しい。

西田幾多郎は、自己は創造的世界の創造的要素、絶対的一者の自己射影点という。キリスト教の三位一体

的關係を見ろという。

「絶対矛盾的自己同一として絶対現成的世界は、どこまでも自己の中に自己を映す、自己の中に自己焦点を持つ。かかる動的焦点を中軸として、どこまでも自己自身を形成して行く。ここに父なる神と子と聖霊との三位一体的關係を見ることが出来る。かかる世界の個物的多として、我々の自己の一々が、自己自身の世界を限定する唯一的個として、絶対的一者を表現するとともに、逆に絶対的一者の自己表現として、一者の自己射影点となる。創造的世界の創造的要素として、創造的世界を形成していくのである。」（『場所的論理と宗教的世界観』旧全集11巻403頁、岩波書店）

2) キリスト教の聖書も同じように解釈できるという人には、西田幾多郎、滝沢克己、秋月龍珉、遠藤周作（作家）、フランクルなどがいる。ヴィクトール・フランクルは、宗教の根底に共通の「一人類教」というようなものがあるという（『意味への意志』春秋社、p103）

3) NPO 法人平塚らいてうの会。東京都文京区小石川5-10-20 5階。ホームページでらいてうを紹介「日本の女性史の上で不滅の輝きを放つ平塚らいてうの足跡をとどめるため、遺品、資料を保存、展示できる記念館の設立を進め、らいてう研究のセンターとします。また、らいてうの志をうけついで生きる女性たちの学習・交流を進め、女性の社会的地位の向上・男女平等と恒久平和の実現に寄与することを目的としています。」ホームページ：<http://raichou.c.ooco.jp/>

## 文献

平塚らいてう(1983-1984)『平塚らいてう著作集』第1巻～6巻、大月書店、文中【3:45】のように巻数と頁を示す。

平塚らいてう(1994)（作家の自伝8）『平塚らいてう』日本図書センター、文中（自伝 pxx）と頁を示す。『平塚らいてう評論集』小林登美枝・米田佐代子編、岩波文庫、文中（評論集 pxx）と頁を示す。

堀場清子(1988)『青鞥の時代』岩波新書。

（大田健次郎）